「読書感想文に寄せて」

息子が小学生になって初めての夏休み。読書感想文の宿題にとりかかっていた。感想文用の推薦図書を購入したのに全く読もうとしない息子。

「やっぱり、おじちゃん先生（の本）をかくよ。」息子はそういって本棚からすっととりだした。おじちゃん先生が亡くなった時、息子は四歳。大切な人がいなくなるという経験は初めてだった。「だいごわからないけど、かなしくなって・・・こわいからもうききたくないんだよ。」当時の息子は、真剣な顔で静かに言った。だからこの本は、息子にとって悲しい気持ちを思い出すものだと思っていた。しかし、一年生になった息子は、本を開くと懐かしそうに愛おしそうにみていた。

「もし、おじちゃん先生が帰ってきたらどうする?」ときくと「おかえり!またいっしょにあそぼっていう!」息子は笑顔でうれしそうに言った。今の息子にとってこの本は、きっと意味あるものになっているのかもしれない。

ある日の夜、学校の先生から突然電話がきた。「大悟君の読書感想文とてもよくかけています。学年代表に選ばれました。」きいた瞬間、鳥肌がたった。選ばれた驚きもあったが、息子の素直なメッセージが、おじちゃん先生に届いた気がしてうれしかった。

（おじちゃん先生ありがとう、大悟の選ばれたよ。）

私は、心の中で何度も叫んでしまった。

このことがきっかけで、私も色々記憶を思い起こしてみた。甘えん坊の上の娘は、登園時「ママがいいよー」と毎朝大泣きして困らせた。木の温もりある園舎、部屋の真ん中におじちゃん先生がいて、おひざに小さな子がちょこんと座っていた。大泣きする娘に気づくと「ひなこちゃんおいで。やっぱりママがいいよな。」といいながらそっと娘を抱っこしてくれた。そんな優しく心地よい朝が、あたりまえのようにあった。お迎え時、おじちゃん先生はコスモス畑の中にいて、コスモスの花が優しく風に揺れていた。下の息子は、おじちゃん先生をみつけ「バイバーイ」と大きな声でいうと、おじちゃん先生は、振り返って「おーい、だいごくーん」といいながら手を振ってくれた。おじちゃん先生がいない朝は、何か空気がちがう。子ども達もきっとそう感じたに違いない。子ども達は、縁あっておじちゃん先生に出会い、この素敵な園と共に育ち成長してきました。

おじちゃん先生から沢山の愛情を注いでもらった子ども達は、今一生懸命頑張っています。ずっとずっと見守って下さい。

卒園児保護者

（小学五年生、小学一年生）